

失恋倶楽部 -panta rhei L.O.V.E.-

——いきなりですが、橘千百合は失恋しました。

中学の頃から付き合っていた彼氏とは、高校が別になってしまいました。離れ離れになっても、携帯電話という文明の利器が私達の間を繋いでくれると信じていました。

しかし文明の利器の努力もむなしく四月が終わる前に失恋してしまったのです。

来たるゴールデンウィークを前に、彼と遊びに行く約束をしようとしたのですが、彼はバイトがあるからと頑なに拒みました。勿論私は彼を訝しみました、たった二駅しか離れていないのに、その距離が酷く遠いものを感じてしまい、押しかける事もしませんでした。

先週の日曜日、ゴールデンウィークの予定で賑わう街中で、彼と別の女子が楽しそうに話をしている場面に遭遇してしまったのです。私は見たものが信じられなくて、呆然と立ち尽くしてしまいました。そして気づいてしまったのです。

どうして私はその場で怒り飛びだして修羅場にしなかったのか。その答えは私の中にありました。

彼のことなんか——と思っていたのですから。

その後、彼とは無事別れました。私はその日の夜に彼と電話し、よくある喧嘩別れでさよならです。彼とは学校が違うので、よほどの偶然でない限り会う事は早々にないでしょう。

今思うと、別々の学校で良かったなとさえ思います。清々して新たな恋に——

「——行けるわけじゃない」

千百合は屋上に続く階段下の小さなスペースに座り込み、沈んでいた。

「しかもどうして学校で泣きべそかいて、誰もいないのにこうやって独り言言って、新たな恋を見つける気も起きないのに、意味の無い強がりと言ってるの……。馬鹿みたい、馬鹿みたい。馬に蹴られて死んでしまえばいい」

陽が赤く傾き、校内に夕暮れの日が差し込む。日が当たらずにじめじめしている掃除ロッカーにもたれかかるようにして千百合は座っていた。

立ち入り禁止区域の屋上に訪れる物好きはいない。万が一、物好きが屋上に向かおうとしていたのならば、

「……私、変質者よね。優しい人なら救急車、一般人なら警察に通報するレベルよ、こんな顔見たら」

どんな顔をしているかわかっている分、早くこの顔を何とかしないとイケなかった。家でこんな顔したら根掘り葉掘り聞かれるだろうし、見回りの警備員にあえば追い出され、

気恥かしさから警備員を見かけたら逃げる学校生活を過ごす羽目になる。

「もうどうにでもなれ。時間が解決してくれることもあるよね？」

「いや、時は諦めに至らせるだけで、克服したとは言えないよ」

「時間って素晴らしい。朝起きる度にどんどん薄れていくもんね」

「それでも決して忘却できるものではないよ。忘れたいと願う行為そのものが、忘れさせてくれないものさ」

「あーあ、どこかに傷心の私を慰めてくれる素敵な出会いがないかなー」

「君は本当に話を聞かないね。まあ、私との出会いがその素敵な――」

「うるさいわよ、中二病」

「――そして私への第一声が罵声か。……中二病って何なのかわからないけど、話の流れ的にきっとスラングだね」

千百合は漸く目の前に立ちふさがった女性を視界に捉えた。泣き顔で独り言言っている変な女だと見られたくなかったのに、と。

「――手遅れならば、高圧的にあしらえばいいと私は思うのよ。きっとそれが正しい」

「思考がここまでダダ漏れなのは恐怖を感じるね。悟らせるといふ強迫……新しいな」

「新しいのは貴女の顔でしょ。何その狐のお面、かっこいいと思ってるの？」

それは白と赤の狐のお面をした女性だった。威嚇しているのか餌を見つけて喜んでいるのかよくわからないお面を被ってはいるが、千百合は目の前の女性はきっと綺麗な人なのだろうと思った。

キューティクルにまで気を使った艶やかな黒髪に、ほっそりとしたウエスト。汚れやすい靴も新品のように白い。学年を表すリボンが水色、これは二年生の証。

「これは一年目で経ったから靴を買い直したということも考えられる。しかし、このくびれは同じ女性としてけしからんと言わざるを得ない」

「……とんだ変人に声をかけてしまったようだ。お面つけている理由を答えようとしたら、無造作に髪や腰回りをチェックさせられるとは」

「それで、何か用？　ここで変な顔してる私を警備員につきだしても、私以上に変な上級生が逆に捕まるだけだと思うけど」

「変な顔をしている君を私の倶楽部に招待したいと思ったのだが……やめといた方がいいような気がしてきた」

狐の面をしている女性は明らかに狼狽していた。千百合は後ずさる彼女の腕をがっしりと掴む。

「ここまで付きあったのだから……聞かせて？」

狐は逃げられなかった。



思春期真っ盛りの高校生活。新たに芽生える恋があれば、枯れる恋もある。

恋愛とは、恋という受け身の姿勢と愛という攻めの姿勢が合わさって巡るものである。故にどちらかに綻びがあれば両者の流れは崩れ、最悪の場合別れてしまう。別れ方によっては恋愛をすることに奥手になってしまい、終いには、恋愛という感情ごと突放してしまう。

又、恋愛をしていることは人に話せても、失恋したことは中々に話せない。それはどうせわかってくれないという同情の拒絶であったり、話しても無駄だという諦めの境地だったりする。どちらに転んでも、自らが進んでは話そうとしない。

一年生になったばかりで、新しいクラスメイトと手探りで接している敏感なこの時期では、失恋話を促してくれるほどの仲までは成長していない。

悩みを抱え、新たな恋に旅立てない人だけが入部できるという失恋倶楽部がある。学校非公認であり、普通に生活している分では決して耳にしないこの部活は極秘裏に開かれているという。

「そんな怪しげな部活に入れと言うの？ ……私が惨め過ぎて、そんな与太話を？」

狐の面の女性——便宜上こっくりさんと呼ぼうか——彼女が語ったのは失恋倶楽部という直球すぎて恥ずかしさを通り過ぎて呆れてしまうほどのネーミングセンスの無い部活だった。

千百合は上級生のこっくりさんに対して嘲笑する。

「人が傷心している所をつけこんで、変な部活に勧誘する。詐欺師と同じ手口じゃないの。どっから私の個人情報を入れたかはわからないけど、失恋専用の部活とかこれ以上くだらないことを言うなら学校に言いつけるけど」

こっくりさんは黙って言葉を受け止めるだけで、売り言葉に買い言葉で返してくると思っていた千百合にとっては想定外で、気まずい空気が流れる。

「——そんなくだないことに、苦しんでいる人がいるんだ」

こっくりさんは先程のやりとりとは打って変わり、重々しく口を開いた。

「誰にも話せない想いというのは、人間誰しにもある。墓下まで持って行く秘密だってあるし、それは自由さ。でもね、同じ悩みで苦しんでいる子を見つけて何もしないと言うのは、とても悲しいことなんだと思う」

「……だからと言って、群れる必要もないでしょう？ 時間が諦めに至らせてくれるのは悪いことじゃないと思うけど」

「いいや、それは悪いことなんだ」

千百合の言葉にこっくりさんは強く否定した。

「私達はかつて恋愛をした。今思えば苦い経験かもしれないが、少なくとも恋愛している間は楽しかったはずだ。告白をして、もしくは告白をされて、一緒に時間を過ごす。諦めと言うのは、そんな楽しかった気持ちでさえも一緒に仕舞って、苦い思い出として分類してしまうことなんだ」

千百合はこの言葉が酷く重いものだと感じた。現に諦めに甘えて、その先のことをおぼろげにしか考えていなかった。自らが経験した失恋というのは、本人の思っている以上に傷ついてしまうものなのか。

「だからこそ私達は、失恋を乗り越えなければならない。新たな恋をするために、新たな舞台へ旅立つ為にも！ 失恋の意味を気づき、そして来たる日に向けて対策を練る。現に私は救われた。……無理強いをするつもりはない。だが失恋倶楽部は君が考えている程甘くはないし、意義はあるのだ。それだけはどうかわかってほしい」

こっくりさんは言い終えると小百合に向かって深々と謝罪した。誠意と熱意が伝わる気持ちのこもった礼であった。

千百合はこっくりさんの真剣さに対して、最後の問いを発した。

「……一つだけ聞かせて。失恋を乗り越えた先に何があるの？」

「恋愛は絶えず流転する。故にその先に何があるのかはわからない。幸せかもしれないし、その先に新たな失恋があるのかもしれない。『Life goes on』——それでも生きなければ。巡る世の中で生きねばならないのならば、幸せになる努力はするべきだ。努力が必ず報われるとは限らないが、努力しないものは決して報われない。それだけは断言できる」

——さて、最後の答えをしたから、今日のところ私は去るよ。

千百合はこっくりさんを引きとめること無く、その言葉の意味を暫く考えていた。

「おや、こんな時間まで残っていたのか。早くお家へ帰りなさい。夜道気をつけてな」

気がつく和外はすっかり夜になっていて、見回りの警備員に見つかって追い出された。それは思っていたほど恥ずかしいことではなかった。



次の日、千百合はこっくりさんと出会った同じ場所に座っていた。曇天が夕暮れの赤を隠し、夜のように辺りは暗い。

「天気とは裏腹に、不思議と気分は沈んでないのよね」

「この天気はもしかするとこれからの道先を示しているかも知れんぞ？」

「あの彼が私に惚れた理由が、『君の笑顔が素敵だから』だったからなー」

「甘い。過去のノロケでもそれは甘すぎる」

「一時でも私の笑顔を曇らせた彼にはいずれ仕返しをしないと」

「それは新しい彼女の顔も曇らせてしまうんじゃないのか？」

「うるさいわよ、中二病」

「いやいや、あの後調べてみたのだが、私はそこまで痛々しくないぞ。右手が疼くとかそんなことは言わない」

「何でもわかった気でいるのが中二病っぽく感じるのよ」

「分からなかったから、私はこの倶楽部に入ったんだがね。——さあ、返事を聞こうか」

——分かっている癖に。どうしてこんな時間にまたここにいるのか。どうしてこっくりさんと変わらずに話をしているのか。昨日との顔つきが違うことに気づいている癖に。

それでも橘千百合は宣言する。これからの一步がどう転ぶかわからないけれど、恋愛をしたあの時の気持ちはどうしても忘れられないのだから。

「決まっているじゃない。私は——」

了